

第九章 立山校区

第一節 立山校区の概要

立山校区は、本市の南東部にあり、海あり川あり山ありの自然豊かな地区である。市街地から現和田之脇経由で約二〇^{キロ}、古田平松経由で一八^{キロ}、北は安城校区、西は中割校区、南は中種子町増田地区と境を接し、東は太平洋に臨み、立山・御牧・芦野・植松・野木・高山の六集落で構成されている。現在過疎化が進み、高山に住民はいない。

人口は令和五年（二〇二三）十一月末現在、男性四六人、女性三九人、計八五人、世帯数四九戸となっている。



図8-25 立山校区の位置

明治十八年（一八八五）九月十五日、アメリカ商船カシミア号の乗組員七人を救助・介抱し、母国へ送り届けた人情味豊かな地域である。

また、種子島では唯一の源氏の里であり、清和天皇をお祀りする清和神社やそれにちなんだ郷土芸能「おつや口説き」もある。昭和十年（一九三五）に弁慶踊、大踊がカシミア号漂着五〇周年記念祭で披露されたが、その後継承されず、途絶えた。

集落は、海拔六二^{メートル}の高台に点在している。気候は温暖で冬季にもほとんど霜が見られず恵まれた気象条件である。過疎化・高齢化が進み、後継者がいないため、遊休農地が増えている。平成二十七年（二〇一五）三月、小学校も児童数の激減により休校となり、過疎化に拍車をかけている。

空港が中割にできたことで、空の便へのアクセスが良くなり、また道路改良工事により市街地へのアクセスも良くなりつつある。

第二節 立山校区の成り立ち

『昔の安城村』に「古は永仁年間（一二九三～一二九八）帝は九二代伏見帝の頃、初めて山を開き人家立つ。人家初めは立山町に立つ。故に立山と記名ある所なり」とある。

安城村は立山に始まるとされ、『昔の安城村』によると永仁年間に遡る。当初は戸数僅かにして五、六戸であり、小川・鯨嶋・長野・岩坪・田上等が住んでいたと言われている。

一方、言い伝えによると立山は「源氏と平氏の壇ノ浦の戦い（元暦二〔文治元〕年、一一八五）に敗れ、敗走する兵士の武将を追って南下した源氏の武将が住み着いた所」とも言われ、清和源氏の祖である「清和天皇」をお祀りする「清和神社」もある。平氏の島において唯一の源氏の集落でもある。地元の官司の話によると、全国で「清和神社」と名の付く神社はここだけだと言う。

その後明応二年（一四九三）二月、一二代忠時の命により「羽生右京」が安城地頭となり屋久島から移住、最初立山に住んで安城を支配した。

立山のどこに住んでいたか定かではないが、古老たちの言い伝えによれば県道東海岸線犬城近くの字六月坂に住んで狩りをしていたという。住んでいたとされる場所は「右京土（殿）」「右京殿の鼻」「右京間伏し」と呼ばれている。

立山に住んでいる間、増田殿と境界争いがあり、立山の出口

に的射場を拵え戦で決着をつけようとしていたが、増田殿が折れて現在の本市と中種子町の境界が決められたようだ。

その後、人が集まり人家は増え、立山では手狭となり、また赤尾木まで遠いことから本村を安城へ移し、（安城への村移し）大野・立山を支配した。これより後昭和十三年（一九三八）まで立山は安城村の一地域となる。

明治十九年（一八八六）、甕島から十数戸移住があり、御牧集落ができる。また、同三十年、野木の峯牧を深川助九郎が購入、当時黒糖製造が盛んで、人出不足を補うため徳之島の石井清吉に依頼、徳之島住民十数戸が入植し、野木集落ができた。

明治四十三年村山里西兄弟が芦野に移住した。これを頼って与論島の人たちが大牟田を経由して芦野に入植し、芦野集落ができた。集落も増え、人口も増えたことから昭和十四年、安城區から分区し、立山校区となった。（初代区長 鯨島民也）。その後（昭和二十年）、奥嵐開拓団が組織され、植松・高山に五十数戸が入植し、植松・高山集落ができた。

第三節 地名・字名（大字安城）

一字名

九郎左エ門・七別当・芦野・植松・尾呂ノ平・鹿毛平・後ノ谷・宝野本・長崎・満足山・舞床・立山下ノ平・立山中ノ峯・奥ノ仁田・中園・平太郎・下田代・峯尾・折口・野頭・小平・上田代・立本・門ノ下・中田代・牧門・岩坂・檜ノ木・番屋ノ平・野間殿・小畑ノ尾・長久保・石牟礼・中ノ山・鹿毛馬頭・敬治平・以加トコ・重松・蔵ノ入・浅畑・古大路・六月坂・野木小野・松峯尾・野木・奥嵐・川俣・平嵐・論ノ迫・木成

二地名

九郎左エ門・七別当

芦野は、種子島家の牧場であった。牧場の管理をしていた者が、九郎エ衛門・七別当氏で、その人物名が字名となった。

現和山

殿様が狩りをする際、鹿を追って来て、その場所で鹿の番をしたのが現和の吉平氏であった。その場所を現在でも現和山と呼んでいる。

込めの山

御牧公民館の東側の山（谷）を込めの山という。殿様が狩りをする際、種子島中の家来たちが鹿を追ってこの山に追い込んで、一晚中見張りをし、翌日飯屋から出てきて鹿を射た。

矢立て石

込めの山が真下に見える山があり、そこに大きな石があった。殿様が込めの山に追い込んだ鹿を射る際、この石に矢を立てかけた。ここから矢立て石と呼ばれる。昭和二十年代建築資材として切り出され、小さくなっているが現在もある。

尾呂ノ平

御牧公民館前の川から芦野の川までを、字尾呂ノ平という。種子島には馬や牛を飼う為の牧がたくさんあった。御牧・牧・小牧・塩屋牧などである。尾呂ノ平は小字名で、牧の馬を集める「オロ」の意味であろう。馬追いが終わると、馬の群れをオロに追い込む。大きさの規定はないが、直径一〇メートルの円形の場所を土手で囲み、一方の口を開ける。その隣に三メートルほどの同じ構造の囲いを造って囲っていた。

御牧

御牧は二一代久芳の私牧であったが、久芳の死後、御牧になった。地名も御牧となり、明治十九年（一八八六）の甌島からの

移住者によって集落が創設された。

ヤマゴウ

立山を開いたときのカワ（泉）といわれている。山泉の意味で立山小学校の西側（中園）にある。現在は各戸ごとに水道が完備され、利用していない。昭和四十年代までは干ばつのに使っていた。とても良い水で、正月の若水迎えはこの川の水を汲んでいた。

野間殿の坂（小字名）

立山小学校から野木集落への市道の途中の坂を野間殿の坂と呼んでいる。種子島の殿様が狩りをするとき、野間の殿様が鹿を追って来て合図をした場所で、このように呼ばれている。小字名も野間殿である。

番屋ノ平（小字名）

江戸時代から、この番屋ノ平には遠見小屋があったといわれている。現在はない。

大変見晴らしがよく、ロケットの打ち上げもよく見える。

日露戦争中は、バルチック艦隊が太平洋を通過した場合には、ここから監視し、現和に向けて通過ののろしを上げることになっていたという。

第四節 歴史的特殊性

立山は、昭和十三年（一九三八）までは安城の一集落であった。

『昔の安城村』によれば、安城村の始まりは、永仁年間に初めて山を開いて、人家が建った。人家は当初、立山町に立っていたため、立山という名が付いた。

立山は、種子島家の禁猟の山であり、『種子島家譜』第一巻に次のような記事がある。

寛永元年（一六二四）六月八日忠時安城村芦野に狩りす。

宝暦元年（一七五一）四月六日安城村芦野に狩りす。

寛政元年（一七八九）二月二十一日安城村芦野に狩りす。

天和三年（一六八三）六月二十七日綱貴公、久時に命じて

「ウシウマ」五疋を種子島に牧せしむ。故に牧を安城村芦

野に設けて之を蕃育す。

また、御牧には二一代久芳の牧「御牧」があり、芦野の牧と合わせて種子島家の直轄の地であったと推測される。狩りをするときは、武田家住宅を仮屋として使用した。

立山校区は立山のほか、五つの集落からなっているが、カシミア号漂着救助の後、明治十九年（一八八六）四月に甌島から御牧に一五戸移住し、御牧集落を創設した。芦野には、明治の末に与論島から二〇戸、植松には一七戸、高山には戦後与論島から一七戸、野木には明治三十年頃に徳之島から二五戸が移住した。

カシミア号が漂着した頃は、立山は戸数僅か二七戸、その後の立山校区の発展は、移住の歴史そのものであり、ミニ合衆国ともいえる。

ウシウマ由来と芦野牧

ウシウマは馬の一種で、たてがみ・前髪・尾が牛に似て全く毛がない、馬を小さくしたような外見からこの名が付いた。無毛の珍種である。

種子島とウシウマの関係は、『種子島家譜』に次のように記されている。

天和三年（一六八三）六月藩主綱貴公より一八代「久時」にウシウマ五疋を賜り種子島にて飼育するよう命ぜられた。

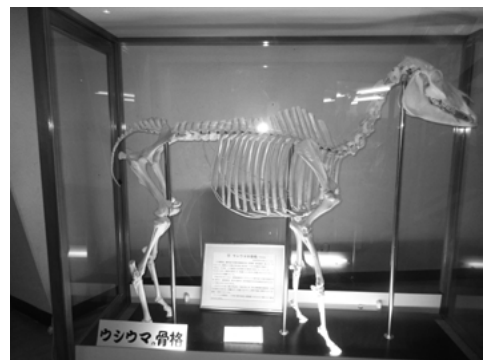
久時は島でも温暖な立山の芦野に牧を設けその馬を放畜し、後来繁殖して今（明治三年）や馬数五十頭に及ぶ。

牧は周囲一里四町（五・六キロメ）とされ、風雪を嫌うことが考慮され、芦野が適地とされたのである。

その後馬数は七、八〇頭まで増えていったが、明治四年（一八七二）頃、公牧廃止に伴い、島内の農民に払い下げられて以来減少していった。明治二十二年には島内にオス一頭がいるだけで、メスは絶滅していた。

これを憂えた田上七之助が、在来種との交配に乗り出し、二四頭のウシウマ生産に心血を注いだ。

昭和六年に国の天然記念物に指定されたが、同二十一年最後



ウシウマの骨格標本（上）と模型（下）

の一頭「第四田上号」が死亡し、ウシウマは絶滅した。同三十八年にはウシウマの骨格が県指定天然記念物となり、鹿児島県立博物館に展示保管されている。

昭和五十七年秋にウシウマの骨格が日本馬事文化財団から種子島博物館に贈呈され、現在鉄砲館でこの骨格を展示している。

大峯牧由来と馬追い

大峯牧は、『西之表市の伝説』によると安城村の平林源助の自牧であったが、寛政年間中、種子島家を取り上げ、それが日喜（二一代久芳）の私牧となり、死後御牧になった。

久芳の支配中、鹿児島から種馬を仕入れられたので、追々馬柄も良くなってきた。

大峯・芦野牧では、卯辰の日、物奉行や馬役が参加して、まず、大峯牧の馬追いをして翌日、芦野牧の馬追いをするものであった。

野木の峯牧

御牧は殿様の牧であり、野木は立山の人々の民有牧であった。馬を放牧しており、早稲田川沿いに牧門、門の下の字名も残っている。明治三十年、深川助九郎に、三二〇〇円で売却した。深川はキビ栽培に乗り出し、石井清吉の斡施で徳之島の人たちが呼び寄せられ移住、これが野木集落の始まりである。

野木の牧の神は、武田嘉右衛門氏の家に仏壇と一緒に祀っていたが現在は祀っていない。武田家には、文政二年（一八一九）十月十四日に記した牧馬の印が馬の絵入りで残されている。「馬の耳矢筈」と記してある。すなわち野木の峯牧の馬印は右の耳をV字に切り込みを入れた形であった。正月二日に親族が集まり、祭りを行っていた。



武田家に伝わる仮屋旗

安城の本村は立山であつた
安城の本村は、もと
もとは立山であつたといふ。
既出のとおり、明応

二年（一四九三）二月羽生右京は屋久島から種子島に入り安城を支配し、立山に居住していたが、西之表との交通が不便であつたことから、安城へ居を移した。

武田家には先祖代々受け継いできた旗がある。地はあさぎ色（薄い藍色）で、幅一尺（約三〇センチ）、長さ二尺五寸（約七六センチ）の綿布である。文字は白く「安城」と染め抜かれている。武田家は藩政時代、殿様の泊まる「仮屋」であつた。この旗は仮屋の前に立てていたものらしい。

立山の仮屋

仮屋は、最初は二間四方の平木葺きの四坪のもので、三年も経つと屋根などが腐れて普請（補修）をしながら使っていたが、



武田家住宅（仮屋）弘化3年築



鹿の解体場

あるときから、武田家の上座が使われるようになった。武田家はこの先も殿様御宿として使われると思ひ、藁葺き屋根を瓦葺きにと願ひ出、普請奉行に許可を得て、瓦葺きにした。武田家は弘化三年（一八四六）一月に建設され、現在も残っている。殿様が狩りをした際、鹿を解体したとされる所は芝を植えられている。これは武田嘉右衛門氏が体の具合が悪いことから、易者に尋ねたところ、ここは殿様が鹿を解体したシバニワだから芝を植えないといけないと言われ、柴を植えたところ、体調が回復したようだ。

立山の武田家（武田家系図・系譜）

立山での狩りは島主の下島のために行われ、極めて大がかりなものであった。この場合、島主の宿所としては立山の「仮屋」が使われたが、後には立山の武田家の上座が使われるようになった。使われるようになったいきさつについては、武田家に残る「口上覚」に書かれている。

立山には、鮫嶋・小川・長野・岩坪等が住んでおり、武田は正保年間に立山に移住したようである。『武田家系図』によると、武田は清和源氏の流れを汲み、種子島の武田家は新羅三郎義光の一九代目、武田筑後守光長から始まる。

光長は京都の小笠原備前入道宗信の弓法の門に学び、明応六年（一四九七）三月免状を賜う。その年春、種子島忠時公、文武諸芸を学ばんと欲し京にある事久し。宗信公に

入門して弓射の術を学び奥義を伝授する。この時光長、忠時公に謁し、弟の光宗乞うて君臣の約を為して、光長、政家、光宗、公に従ひ下島し臣下となる。種子島家「大的始式典」は光長世に伝ふる所と謂う。

光長から四代目の宗次（一作兵衛・主税）は、文禄年間、久時にしたが朝鮮征伐にも一将として参加した。また、寛永元年（一六二四）六月八日安城村芦野の狩りに射手としても参加、武田家嫡流としての家格を示している。

このような武田家がなぜ立山に移り住んだのか、系図には次のように書かれている。

一作兵衛主税宗次は、三人兄弟であるが、宗次には息子一人、日相には子無く、末弟宗芳に息子二人ある。宗次の子が「宇左衛門宗正」である。

武田嘉右衛門氏の話及び系譜によると、正保年中、当時の家老及び物奉行の二子に私曲あり、これを正そうと壮氏一人が集まり話し合い、官に聞ずも二子により十八士の書に対し、謀反を企てたと歪曲して糺され、十八士は処罰される。うち四人は首謀者として死罪、宇左衛門ほか四人は追放となったが、ほとんどは配所で切腹した。生存は三人で、宇左衛門は立山で二〇歳を出たばかりの短い生涯を閉じた。

武田家に残る「正保十八士切腹題目石由来」によれば、翌正保三年（一六四六）夏、不慮に仰せつけられし候者ども、遺恨を残し野心不忠の段御聞に達し、張本人切腹、余

等は牢人、家跡は全て召し禿げられ、思いもよらず在所所々へ縁を取り、引き移り候とあり、全ての身分と禄を剥がれた家族の困窮は察するに難くない。

宗正の家系はこれで絶えたが、身分とそれまでの禄四〇斛四斗一升を失った武田一族は、たちまち困窮した。宇左衛門宗正に子は無く、日相の弟宗芳の子宗次、宗清たちはその家族を連れて立山に生活の道を求めたのであった。系図に、宗正の恨みを「後見の者憤然として、生きてはその肉を食わんと欲し」と抑えたい激情をもって示しているが、それも生活の苦しさからの思いもあつたと考えられる。

その後、万治三年（一六六一）一八代久時の時代、十八士の家跡全てお取立ての思し召しがあり、正保の件について生き残った三人に十八士の件について事情を確認し、事実と異なることが判明し、十八士の家跡は、本領半地ほどを下されることになった。武田家もまた家跡お取り立てとともに宗芳の二男宗清を跡目に立てた。

一方、宗芳の孫、宗実・宗房はそのまま立山に居付き、禄二斛の足輕の身分を得た。さらに後飯屋番などの役職により、約八斗の切明畑を許され、家計は順調な発展を見たのである。

正保から一三〇年後、立山の武田家はおよそ二十数戸を数えるようになったようである。天明四年（一七八四）の当主である宗香の記録によれば、「安城村立山は、安城村官第と隔離する事

二里余程の山中にあり。武田家は三千有余なり。一〇戸の内七八戸は吾が武田家の余裔なり。元々の住民たちとも人心よく和し一家のごとし。」と記される。

武田嘉右衛門氏によると、このような事情で立山に移り住んだこともあり、もともと住んでいた村人に気を遣い、門松なども村人が立て終わった後に立てたという。

カシミア号漂着事件

明治十八年九月十五日、昨日までの嵐も収まり海もすっかり風ぎて、海好きの周吾婆さん（武田周吾郎の妻キク）は、いつものように早朝からオオゴシリの鼻（舞床浦）の海岸にミナ（貝）を拾いに出かけた。大黒瀬の辺りでミナを採っていて、ふと顔をあげたその鼻先に異様な風体の大男が数人ボートを漕いで近づいてくる。ビックリ仰天、腰を抜かさなばかりに驚いた婆さんは、今来た坂道を這うようにして駆け登り、立山小学校の河内英蔵先生に知らせた。

同じ時刻に武田六次も長崎鼻まぐさに秣刈りに出かけ小船を発見、コレラ舟と思い、同じく河内先生に報告。二人の同時発見で、村中大騒ぎとなった。

河内先生は村人を先導して救助に向かった。舞床浦に着いたとき漂着者たちは、早稲田川で水を飲んでいたという。河内先生は古例なまに倣い筆談で話をしたところ、中国人がいて事情がわかった。

カシミア号は風帆船で九三六ト、石油三万四〇〇七箱を積んで兵庫（神戸）の港へ向かう途中、台風に遭遇し破船。乗組員一五人のうち三人は波にさらわれ死亡、残り一二人、うち七人は十四日にボートで脱出し、立山舞床海岸に十五日漂着し救助された。残り五人はいかたで二十日伊関海岸に漂着救助された。

当時立山には旅館がなく、旅人を月当番制で泊めることにしていた。このときの当番は岩坪平左衛門で、また、海岸からも近いこともあり、そこへ漂着者を連れて行った。

平左衛門宅で懇切に介抱し、元氣を取り戻させた。風呂に入らせ、村人の着物を着せ、最初は唐芋を与え、夜は焼酎やご飯などで栄養をつけさせた。すっかり元氣になった七人を、翌朝、馬で西之表の方に送っていった。当時の馬は小さくて鞍にまたがると足が下についたという。その後、母国へと帰っていった。このような懇切な救助に対して、アメリカ大統領「クリーブラント」は、岩坪平左衛門と伊関の古田貞吉に金二五円と金メダルを贈った。

メダルが届いたのは『安城小学校沿革史』（明治四十二年筆記）によると、「交付は明治二十二年三月」と明記されている。当時種子島では、鶏卵一個四厘（一厘は一円の一〇〇〇分の一）教師の俸給が二円から四円五〇銭、当時の二五円は途方もない大金であった。

救助に向かった者は、河内先生のほか、武田六次・武田周七・藤九郎・鮫嶋茂助・武田助三・増田村の野辺善七・川辺郡唐仁

原（加世田市）の田原早八・静助兄弟・鮫島新助・武田英助・武田勝次郎など、ほとんどの村人が集まってきた。

心温まる救助に感激したアメリカの一市民「ホールスカッター」はアメリカの上院に「感謝決議」を懇願し、大統領は両院の決議に応じて、安城・伊関両村民に五〇〇〇ドルを贈った。当時の五〇〇〇ドルは軍艦一隻が買えるほどで、邦価にして六六四一円九九銭。為替手数料、送料を引いて六六一五円五二銭八厘。これを両村に各々三三〇七円七六銭四厘ずつ配分された（明治二十三年二月）。交付に先立って知事は、「この金を本来の用途、両村の教育資本以外には使ってはならない」ことを念押しし、両村は「合衆国よりの贈与金に対する維持方法規約」を作成した。

明治二十三年八月、両村に「紀徳碑」が建立された。また、昭和九年九月には、漂着地の立山に漂着記念碑を建立した。

安城（立山）では、このお金を基に「育英財団安城奨学会」を設立した。当時高等科は榕城小学校にしかなく、また交通の便も悪いことから進学するのも大変であった。野首の民家を購入し、安城寮（寄宿舎）を設置し、入宿者は自炊した。その後野首から小牧に移した。昭和四十三年に交通の便も良くなり、利用者もいなくなったことから売却した。

昭和二十八年二月、立山小学校では、町末義先生の作による「歌劇 カシミア号遭難の歌」を学芸会で発表、当時はまだカシミア（ア）号救助に関わった人たちが生存していて、劇を見

て涙を流していた人もいたという。

カシ米尔号遭難の歌

序 説

壮々とそびえる千古の松の、その蔭も深く東海の荒磯の、とうとうとのたうつ舞床の浜辺は、今尚人陰少なく独り佳境の磯と千鳥のみが日毎、夜毎波間にたわむれ、浮きつ、沈みつ、泣き暮らしている。

その浜辺近く夜毎のしづきをあびて輝く壮麗な石碑が哲人のように立っている。遙かなる太平洋の一角をみつめて立っているのである。通りがかる人は誰でも奇と思ひ怪と思ひ見るであらう。

しかも、文字鮮やかに、^ノ米国人漂着地跡^ノと記してあるからには、その由来に耳を傾けずにはおれない。

村人の語り伝えるその物語は、恰も、^ノナイチンゲールの博愛の情又細やかにして、そぞろ熱涙を誘うものがある。

大海に幾日となく死の漂流を続け、又ここに死の魔と斗う。最後の運命のそのきわに、馳せかけ着けた村人のねんごろな、夜を日にかけて盡くした暖かい看病は、やがて帰国の喜びとなつたのである。

帰国後の米国人は、早速これを国際的な事件として国会に上提した。米国々会はその恩礼として多額の謝礼金(当時の三千百円)と金のメダルを送り届けたのである。

その金は青少年の奨学資金として積み立てられているが、尚

年毎に行われる石碑まつりに、村中そのメダルを仰ぎ、そぞろ祖先の偉業を偲びつ、語り伝える民情は、郷土に伝う最上の文学でなくて何であらう。

浜の石碑が朽ちるまで、この暖かい民謡は永遠に消滅してはなるまい。

海山遠く厳かな人類愛と世界平和への歩みと共に

一九五四、^ノ町^ノ

人知れぬ

東の海の荒磯に

慕情に明け暮る

白亜の石碑

米国帆船

「カシミア号」物語

米国帆船

「カシ米尔号」の歌

作詞 町 末 義 作曲 武 田 宗 吉

採譜 羽 生 和 正 編曲 榎 本 美 千 代

歌詞記録保管 小 倉 良 光

□ カシミル号の遭難

- 一 舞床浜の磯づたい
泣く音は淡し浜千鳥
男浪女波の沿い寄せる
なぎさの石碑永遠に
- 二 語り伝えよ末までも
アメリカ商船カシミル号
遭難事件の物語
人世の情けの語り草
- 三 時は明治十八年
九月も半ばの台風期
名月今宵も白々と
太平洋を照り渡す
- 四 石油を積んだカシミル号
豪州港を船出して
洋上はるばるの横浜へ
急ぐ船路に波高し
- 五 折しも起こる台風に
船は次第に動揺す
俄かに襲う風嵐
- 六 激浪たちまち天をつく
哀れ木の葉のカシミル号
闇なす潮路に流される

十 幾余名の乗組員

- 七 必死になつて尽くせども
吹き巻く風にマスト折れ
逆巻く浪に舵碎け
運命ここに尽き果てて
- 八 はるか故国を伏し拝む
はるかに望む島の影
命を波間にまかせつつ
母船を離れるヒナボート
- 九 島をたよりに漕ぎい出す
ボートは波間に浮き沈み
嵐は小船を吹き回す
救いを求める術もなく
- 十 行方知らずに流される
行方知らずに流される
行方知らずに流される
行方知らずに流される

□ 発見

- 一 情けの島の種子島
誉も多きその中で
今でも名高き里がある

二 風は風て秋日和

- そこは立山衆の村
そこは風て秋日和
いつもの周吾婆さんは
みなを拾いにいそいそと
出かける大田尻鼻の下
これはこれは 何者か
ボートが磯辺に打ち寄せて
身の丈六尺赤毛の裸
青目の鬼と腰抜かす
腰を抜かしちや上られぬ
心急いでじたばたと
息切れかけこむ走り込む
所は立山小学校
五 周吾婆さんこれ何事ぞ
落ち着け急ぐなよく語れ
河内校長がせき立てて
事の次第を聞き給う

□ 遠見

- 流れ尽きせぬ清水の
浜の淵かけに異国人
いまわの力も尽き果てて

水に潮波流しつづ
涙にくれる磯千鳥

四 救援

- 一 ここに出るのが岩坪兵左衛門
村の役所の世話役さまよ
チャンチャカチャンチャカ
チャンチャカチャン
二 次に出るのが英蔵校長
学者通訳で事なく正す
三 ここに乗り出す背低い人は
支那の通訳商人でござる
四 ここは何処よと
漢字で聞かる
五 ここは大隅 種子島 立山
そこは何処よと
尋ねて聞けば
六 ここはアメリカ商人組みよ
わかる話には皆ほほえみぬ
七 この衆たち英助・新助
勝次郎たち かごやの準備
八 老いも若きも子供も妻も

手足抱えて連れ申す屋敷

九 ここは平左の仮病院よ

妻のケサ女が

婦長さんでござる

十 若いお医者さんは

長男の平八よ

妻のスマさんが

看護婦で看病

十一 朝はおかゆで夕べは肉よ

昼は海山 魚にお酒

十二 村の情けは海山越えて

愛と情けで夜を日に尽くす

十三 ここに嵐も事なく忘れ

のどかな日和に喜び遊ぶ

十四 やがてかけ着く郡長牧野

区長の榎本忠兵衛殿よ

十五 事の伝絡で長崎領事館

帰国の報せに手をあげ喜ぶ

住

五 別 離

一 情けは海をはるばる越えて

見知らぬ他国の隅までも

届いて今日こそ別れゆく

握手は涙の袖の露

二 馬に跨り手綱とり

芦野の広野をスタスタと

名残とどめて振り返る

さらば日本の立山区

六 慕 情

ご無事のご帰国早かれと

祈る思いの袖の露

湧き出するうれし涙声

共々に傷む人の情

浜の石碑の朽ちるまで

慕情は永久に寄する波

甑島からの移住（御牧集落）

甑島では、明治十六年（一八八三）以来、虫害、連続しての台風被害が打ち続き食糧難になり、住民たちはやむなく種子島移住を決意しなければならなかった。

移住したうちの約一〇戸は立山の集落世話係「鮫島新助」の案内によって字「後ノ谷」に移ってきた。その地は人が住めるとは思えない荒地で、その中に安城の人たちの手によって建てられた長屋がポツンと建っているだけであった。その長屋をいくつかの部屋に区切ってそれぞれの家族が新しい生活を始めた。着のみのまままで移住してきたため食料も衣類もなく、立山の人たちから食料などもらって生活を行った。そのうえ、新たな不幸が移住者たちを襲った。伝染病である天然痘（疱瘡）が流行し始めたのである。そのため多くの遺体を出し、その死体はまとめて字宝ノ本に埋葬された。墓石は浜石を用い、「疱瘡墓」と呼ばれている。

疱瘡墓は現在荒れ果ててしまっているが、現存している。しばらくすると、この伝染病もようやく治まった。

そして土地を分配してもらい農業を始めようとしたが、土地は雑木が生い茂り開墾しなければならなかった。努力の結果どうにか芋、粟を作るようになったが、人と家畜の食用になるだ



御牧移住記念碑

けで、お金にはならなかった。

明治四十年代になると大分県から移住した人が御牧の山で椎茸栽培を始めたので、元気な人は働きに行き収入を得ることができた。その仕事は大変つらいもので、朝早くから夜遅くまで働いて、一六銭にしかならなかった。

当時の生活は現代の私たちには想像もできない生活であったという。移住者の強い開拓精神のお陰で、今日の御牧集落ができあがり土地の人たちと変わらぬ生活ができるようになった。

移住してきた者の姓は、中村・木原・和田・梶原・小幡・宮野・山下・日笠山等であった。宗教は「浄土真宗」であった。

御牧の公園地の移住記念碑裏面には次のように記されている。

明治十九年甕島より移住した吾々の祖先は、立山区を定住の地とし御牧部落を建設した。未開の当部落を開拓し永遠の平和郷としての基を定められた。昭和二十七年七月部落民挙って祖先の偉業を讃へ、尚、永遠に連なる繁栄を祈りつつ、西岸寺野田氏の土地提供を得てここに記念碑を建

立する。

徳之島からの移住（野木集落）

明治二十八年、石井清吉は種子島を訪れ調査し、同三十年十数戸を連れて野木に移住した。

その頃の種子島は、折からの砂糖景気であり製糖業者は目をむいていた。その中の一人、深川助九郎（佐賀県の財閥）は生産を増やす手段として原料のキビ栽培に注目。当時立山の武田・鮫嶋の共同牧場であった野木の土地の購入を考え、共同牧場を三一〇〇円で買収することに成功し、土地は深川の物となった。しかし、一家で耕すにはあまりにも広すぎた。まして他集落の人々がこの不便な地に移り住むはずもない。そこで四方に考えをめぐらした末、思いついたのが、石井氏のいる徳之島だった。深川助九郎は石井に徳之島島民の移住を依頼した。当時徳之島島民の生活は貧しく、このような不便な地へでも逃れようとしていた。石井は徳之島で、生活向上のために尽力し、島民の信頼を得ていた。

石井は種子島野木の実情をありのままに話し、島民に移住を勧めた。石井を信じて十数戸が野木に入植してきた。移住後約半月、入植地に住居ができるまで立山に滞在し、その間の食事その他一切を深川が世話をした。

野木に入植し、新天地で彼らは「耕すものは我が物に」と骨身を惜しまず働いた。しかし二カ月、三カ月経ち物事に通じて

きたとき、彼らは単に深川の一労働者であることを悟ったのである。当人たちの落胆のほどは改めて記すまでもない。しかし野木に入植した人々は土地を自分の物にしたいという希望は捨てなかった。

深川からの報酬はいたって少なかったという。そのなけなしのお金を皆、蓄え出した。いつ物にできるかわからないが、とにかくお金のために精を出した。年月は経ち、開墾された土地は日増しに増え一面のキビ畑と化しつつあった。それと逆行するかのごとく、深川の製糖業は段々衰退の道をたどり始めた。そして深川は土地を手放し始めた。入植者はこれまで蓄えてきたお金で土地を譲り受け、自分の土地としていった。

ついにあるべき新天地と化した我が畑を愛す移民者、野木集落の生活は開始された。平和な、静かな、のどかな野木は、移民者の生活の場所となったのである。

入植当初、住居は掘立て柱で、幅三間長さ四間、一二坪ほどの広さ、土間には粘土でかまどを作り、居間には囲炉裏を作り、床はにが竹を編んだ上に簡単な畳を敷いたものであったという。当時、広田・常・禎・壽・宮田・島・直・横山・遠藤等が入植してきたという。昭和五十四年（一九七九）頃、馬毛島から入植者があり、現在野木集落は一一戸二二人が暮らしている。

第六節 戦争と疎開

立山は、中種子町増田の海軍飛行場に近いこともあり、昭和十九年（一九四四）頃から飛行場への艦砲射撃の破片や機銃掃射の流れ玉が飛んでくるようになった。

そのような中、昭和二十年に県の施策で児童の疎開が決まり、立山小学校の二年生から六年生六八人（親の都合で疎開しない児童もいた）と保護婦三人（中村ヨ子・木原スミエ・常カズ）田上教頭先生、鮫島トシ教諭の引率で、四月金十丸（かなとまる）にて鹿児島へ向かった。当時の伊佐郡山野町山野校区小木原の民家へ二人ずつ引き取られ分宿した。

疎開当時、引率した田上致雄教頭の疎開録が残されており、内容は次のようなものとなっている。

分宿も日数が経つにつれ不平不満が始め、県からも合宿を指示されていた。地区の区長と相談し、六月二十三日、芦野の児童を浄土宗のお寺に（鮫島先生の下宿、木原スミエ氏を配置）、七月一日野木を種馬所（しゅばしょ）（常カズ氏を配置）に、同十五日御牧、立山を天理教（中村ヨ子氏を配置）に、それぞれの合宿を開始した。

いざ合宿を始めてみると、食料が不足し、配給だけでは全員の食欲を満たしていけなくなり、県の非現実的なやり方が情けなかった。戦局は日ごとに急迫し、疎開者は山野へ山野へと押しかけ、木小屋、馬屋の隅までも詰まってし

まう状態で、物価はヤミ値となり容易に手に入らなくなる。山野は米どころだから手に入るだろうと思っていたが、供出で中々手に入らない状態、やがて米は配給となり、期的に芋も少ししか入手できないので、米の代わりに芋でも言うわけにもいかず、食料不足のこともあり子どもたちも日増しに栄養不足で痩せてくる。こんな状態なので自給自足をと考え、部落会長や個人とも交渉して土地（竹山、笹藪）を三反歩借りて開畑に着手。高学年の児童や山野小学校の加勢をもらい畑にし、苗も人の残り苗をもらうなどして、七月中旬に植え付けを完了した。秋になれば芋も収穫でき、食料不足も少しは解消できるのではと、少し希望が出てきた。

子どもを引き取れば各家庭からの不満も出ないだろうと特に注意を払い、保護婦には言い含めて朝夕生活の指導をしたが、十人十色で寮の外部までは目が届かず、聞き分けのない子どもは不時着の飛行機のタイヤを切り破り中のチューブを取ったり、人の家に侵入して飯を食べたり、畑のスイカ、トマトを荒らしたりする。生水を飲ませないために「ゲンノシヨウコ」を煎じて備えていても生水をがぶがぶ飲む。生柿を食べる、大豆を缶詰の空き缶で炒って食べるなど油断できない状態だったが、次第にそれもなくなり安心した。世間の人たちは、針小棒大に、悪事は疎開児童がする物のように言うため、嫉の難しさを痛感した。

山野に来て子どもの健康に大きな影響を与えたものは気候だった。昼間は大変暑くても、夜中になれば急に寒くなる。疎開してから間もなく風邪をひき、百日咳となり、中には肺炎を起こし大口の医者にまで通い、付き添い保護婦の苦労は一通りではなかった。分宿から合宿に移る頃まで百日咳は根が切れず、薬を飲み続けていたが、身体が衰弱しており、加えて疥癬かいせんが outbreak 次第に広がりそうなので七月一日、七人だけ栗野岳温泉に鮫島先生、中村ヨ子さん付き添いで湯治に行った。二週間の湯治で大体良くなり、その後も投薬治療を続けた。

七月の中旬頃になると今度は下痢が大流行し、芦野の浄土宗の付近は一軒から三人も死亡するという激しさであった。不幸にも八月一日、浄土宗（芦野）の青山義光が血便をすることがわかり、医者に連れて行き、注射や薬を飲ませた。お寺は人の集まりが多く他の子どもへの伝染も考えて、区長や班長の方々、町の疎関係にも来てもらい、適当な場所へ隔離所を作ってもらい相談をし、学校から硝子戸ガラスや畳、戸板等を運んでもらい、八月二日小屋に移った。町の方で付き添いを付けてくれるとの事であったが、それもかなわなかった。結局鮫島先生と木原氏に付き添いをして貰った。外部との接触を避けなければならないので、残りの児童は山野小学校への登校を停止させた。

一難去って又一難、又もや芦野の浄土宗寮から「村山義

弘」が罹^かつてしまう。隔離小屋に收容し、八月十二日容体も少し良くなり、保護婦の打ち合わせを神社でする予定で集まっていると、付き添いの木原氏が「義弘が死にそうだ」と呼びに来た。木原氏を医者に走らせ義弘の所へ向かった。声をかけ非常袋の薬を飲ませると少し落ち着いた。話もするし薬も飲んだので、また神社の方へ行くとまた呼びに来る。駆けつけてみるもはや駄目であった。医者も都合が悪いと来てくれなかった。中村氏を学校や役場へ、常氏を区長の所へ報告に行かせ、教頭先生は医者^の所へ診断書、埋葬のことを相談に行った。その日はしきりに退避の鐘は鳴るし、面会も中々できなかった。区長に墓地のこと、埋葬のことで相談すると、集落の決まりで「伝染病の死人の所へは近寄らぬこと、死人の担ぎ方も親兄弟外の者はしてあげられない」とのことに他国の空のあわれさをしみじみ感じた。山野小学校の校長先生に相談すると「そんなことに心配するな、職員が担いでやる」ということで、安心した。穴と棺は集落の方が一〇人ほど集まりそれぞれ準備していた。小屋の外には男性職員、助役、学童係など並んで見送ってくれた。棺は校長先生がまっ先に担いでくれ、途中交代しながら墓地まで向かった。集落の人たちは恐れて葬儀には参列してくれなかったが、義弘は沢山の先生方に担がれ見守られて、賑やかな停車場に近い踏切の大通りのそばの墓地に埋葬された。実は火葬にするつもりだっ

たが、大口の火葬場設備が中止で、仕方なく仮埋葬を行った。

義弘が死亡して一週間目、八月十八日種馬所寮で野木の直都啓^{くじょう}が、さらに二十八日には宮田サエ子が、九月一日には直隆男が発病。区長に相談し、便所のこと、病人用の鍋釜、消毒のことなど都合をつけて頂き、常氏には専ら看病に専念させ、中村氏にも加勢させた。しかし、看病の甲斐もなく九月六日の夜明け四時頃直都啓が、五時頃に直隆男が死亡した。

軍医の治療も受け、また、下西小学校の保健婦の先生にも来てもらい養生は十分にしていたが、病勢は一向に衰えなかった。

野木の受け入れ集落は小木原中区で、(浄土宗の所は小木原東区)班から二人出で二〇人ほどの区民が一切合切引き受けてくれ、職員併せて三〇人ほどの葬式をして頂いた。

貧乏は続くもので、浄土宗の隔離小屋にいた、青山義光が死亡した。赤痢に罹^かつてから三七日間丁寧な看病で赤痢は全快、腎臓を少し悪くし腫れていたが、次第に減って来ており、医者ももう大丈夫と言っていた矢先のことだった。戦争も終わり、叔父に当たるといふ村山松元氏が看病をしてくれていたが、腕に抱かれて息を引きとった。

疎開先の子どもたちも、保護婦の方も先生方も、環境、

食事、病気等大戦争であった。

令和五年（二〇二三）現在、疎開した方も当時二年生の方が二人、三年生の方が一人、六年生が一人しか残っていない。開畑して植えた芋も食べたのか記憶にないとのことである。一人の方は今でも疎開先の方と交流している。戦争の最中親元を離れ、知らない土地の方のお世話になり、分宿中は里親の方々も大変な中、疎開児童を受け入れて頂き、親身にお世話頂いたことに感謝しているという。

合宿での生活は強烈に記憶に残っているようである。食糧難、赤痢の蔓延と四人の死亡、保護婦の方々の並々ならぬ苦勞を子どもながらに感じており、話すたびにその部分が強調される。

第七節 人物

羽生右京能房

羽生右京能房は、文安二年（一四四五）生まれ。明応二年（一四九三）二月癸己の春、二代忠時の命により、屋久島から種子島に移住し、安城地頭となり、永正十年（一五一四）七月十日死去、六九歳。

立山に居住し、その後安城へ居を移した。古老の言い伝えによると、最初右京が住んでいた場所は、県道中種子線の浅畑橋を渡ってすぐの所であり、黒山尻の丘（字浅畑）に住み、猪・鹿狩をしていたという。

昭和四十四年（一九六九）一月頃、昔の言い伝えをもとに当時の立山集落長たちが、羽生右京が住んでいたといわれる場所を探し出し、棒標を立て写真を撮ったことがある。

右京は後々のためにも村の境界を定めたいと考え、増田殿と境界について幾度となく話し合いを



羽生右京が住んだといわれる六月坂の山城跡

行ったがなかなか決まらず、(その場所は論の迫と呼び字名になつてゐる)。右京は話し合いでは決着がつかないので戦で決めようと思ひ、立山の出口(中ノ園)に射場をつくり、家来に弓矢の練習をさせた。これを聞き及んだ増田殿は、戦では負けると思ひ、境界については右京の望みどおりになると遣いを出し、現在の境界ができた。射場は現存しており、旧暦一月二十三日の祭りを行つてゐる。

その後人家も増え、立山では手狭となり、また赤尾木にも遠いことから、安城へ村を移した。小川・鮫嶋・岩坪・長野は右京に仕え、長野は丸野に、小川・鮫嶋・岩坪は古殿に居住したという。

岩坪平左衛門

明治十八年(一八八五)九月十五日、立山舞床海岸にアメリカ商船「カシミア号」の乗組員七人が漂着し、立山集落民が救助に当たつた。

その当時立山には旅館と言うものがなかつた。しかし山間僻地とはいつても、たまには商人も来るし、役人の出張巡視もある。そんな場合に備えて「非常勤」の旅人宿が一定期間ごとに指定されていた。たまたまこの時の当番が岩坪平左衛門であつた。救助した七人を平左衛門宅に連れて行き懇切に介抱した。

アメリカ合衆国から功績のあつた者について照会があり、戸長代理の肥後時宏が提出した報告書を見て、アメリカ大統領は、

岩坪が「賞揚且賛美スベキ救助を与へタル日本人」であるとして、金二五円と金メダルを贈つた。金メダルはその後財団法人安城奨学会が購入し、現在種子島開発総合センターに保管展示されている。

高山七太郎(一八七五—一九五二)

明治八年長崎市生まれ。昭和二十七年三月六日、七七歳で死去。一〇歳頃、中国人の陳国樑の養子となり、「陳世科」と名を改める。

明治二十一年、金門島へ行き、義母に育てられる。同二十八年二〇歳のときに長崎に戻る。ドイツ人のマッチ製造業者から技術の提供を受け、マッチの製造販売を手掛け成功した。

明治四十四年に日本国籍に復帰し、高山七太郎の名に戻す。大正三年(一九一四)二月、三九歳のときに安城奥嵐(立山高山)の山林五五町一反四畝を買収、同年十二月一日安城へ転居した。種子島殖拓合名会社を買収し、「高山合名会社」に変更した。五〇万円の巨額の資金を投下し、広大な山林などの土地(六〇〇町歩)を買収。目的は樟脳の殖産事業を興すためであつた。

昭和十八年十二月二十四日、中種子町の要請を受け六〇〇町歩を破格の廉価七万円で譲渡した。中種子町はその功績を讃え、「頌徳高山七太郎翁之碑」を牧川に建立した。

昭和五十年代古老鮫島民也氏によると、奥嵐(高山)に人を

集めてお金を「ばら」（竹で編んだザル）に入れて拾わせたと
いう。昭和初期生まれの人たちまでは、七太郎を良く知ってい
た。七太郎は豪邸を造ることなく高山を離れた。

長男の高山勝都氏は安城の田上幸吉の娘「タチエ」と結婚し、
四女をもうける。一時東京に住んでいたが帰郷し、芦野の自作
農創設組合にも関与した。勝都氏は高山で、四〇歳で死亡した。
住んでいた場所は現在も残っている。

石井清吉

石井清吉は、安政三年（一八五六）三重県渡会郡小俣村で生
まれた。一八歳で慶應義塾に入学、福沢諭吉の下で法学・経済
学を修めた。その後、東京日日新聞の記者を経て、沖繩にわた
り米穀会社を経営、その後徳之島へ移住し「広田トナ」と結婚、
私塾を開いて島のリーダーを養成した。

石井は明治二十八年種子島を訪れ、開墾場所の調査を行い、
同三十年徳之島の十数戸の家族を伴って野木に入植した。石井
は野木でも、地域生活上のために尽力した。

あるとき、立山小学校を廃止し安城小学校と合併する案が村
議会に出された際には、石井が合併の条件として「通学路上に
ある三つの川にコンクリート製の頑丈な橋を架けること」を理
路整然と要求したところ、合併案が白紙に戻され、立山区民
は安堵した。

このような出来事を経て石井は種子島でも一目置かれる存在

となった。移民指導の傍ら、養鶏、エクス製造、キノコ栽培に
従事、後、養蚕にも着手、自ら農業経営の模範を示し、移住民
はその指導を受けながら集落の基礎を作って行った。

大正十三年、本市榕城中目において六九歳の生涯を閉じた
（『種子島研究』第四号）。

第八節 年中行事

旧暦六月

十三日

清和神社六月燈

一月

七日

昔は、福祭文、白起こし等行われていた。又、夜、地炉に鳴ら柴（ハマガシの木の枝）をくべる（燃やす）とパチパチと音がして、その音に鬼が驚いて餅を落とすといわれ、子どもたちは翌朝早く起きて、門柱を見ると餅が乗っていた。

十五日

このみやじょう

小正月とも呼ばれ、十四日五日の正月ともいう。農業の正月ともいわれ、農機具をきれいに掃除して、倉庫にごさを敷いて並べ供え物をして感謝した。

また、稲を刈る際、水口の稲を根っこから引き抜き、倉庫に掛けて置き、十五日にもみを臼で挽いた物を釜で炊き沸騰するのを稲藁にもみ殻等を付ける「穂垂れ引き」を行い、農具と一緒に供え稲に感謝を捧げた。

旧暦一月

二十三日

射場（的場）祭り（破魔行事）／井出祭り（射場で祭事を行った後、取水口まで行き祭事をする。）

八月

十三～十六日

十三日はお盆の入り、自宅の門口に迎え火を焚き、精霊様を迎える。（十三日夜から十五日までは、魚は食べない）十四、十五日は墓と家の門口に火を焚く。十六日は精霊送り、及び精進上げ。

九月

十五日

カシミア号漂着・救助記念日祭

十月

二十七日

清和神社願成就祭（現在は、二十七日の直近の土曜日に開催）

第九節 伝説

鹿狩り

『西之表市の伝説』によると、昔、一般の人は鹿を獲ることを禁止されていた。殿様は三年に一回「お狩り」と称して鹿狩りをした。

立山の火立て峯という山があり、そこに生えている高い松の木の上へ上がって火で合図した。種子島中の武士たちが一戸から一人ずつ、十六番の鴻峰の所から鹿を追って来た。そして一日で立山の御牧の裏の込めの山に追い込んだ。それでそこを「込めの山」と呼ぶ。その晩は二重も三重も人が立ち回って番をした。翌日、殿様が飯屋から出ていき、追い出される鹿を射た。

論ノ迫

早稲田川の上流に論の迫と呼ばれる場所がある。これはずっと昔、安城殿と増田殿が、境界をはっきりしようとして早朝に家を出てこの場所で会い、境界を定めようと論議をした場所である。野木集落への道になっているところを野間殿の坂といい、立山から野木に至る三角山線の、野木橋の西側の谷を論の迫といい、小字名になっている。

また、北の現和村の吉平氏との境界も右京殿の望みどおりに決まることになった。

立山の射場

立山の射場は、安城村と増田村の境界を定めるときに作られたものだと伝えられている。現在、立山集落では「的係」を置き、旧暦一月二十三日に祭りを行っている。



立山の射場

第一〇節 史跡・神社仏閣

カシミア号漂着記念碑

明治十八年（一八八五）九月十五日、立山舞床海岸に七人が漂着し、救助したことを記念して立山港に石碑が建てられている。（平成二十四年（二〇二二）十月三日 市文化財に指定）

（前面） 米国人漂着地趾

（裏面） 昭和九年九月 安城区民建之

西之表町長 三浦安能謹書

芦野 山家の氏神・按司根津栄神社

按司は与論島の山家の祖先が、琉球国王より賜った官職である。安司とは島の守りをする役目であり、与論ほか七島をも統括するよう命じられた。

しかし、その後琉球王と戦になり、矢に当たり戦死した（旧暦八月一日）。山家では按司王を



カシミア号漂着記念碑



按司根津栄神社



立山のエビス神

氏神として祀る「按司根津栄」神社を建立。宮司の山玉治はその後、長崎県口之津へ移住。後の宮司は一族の市来家で、玉治は明治四十四年に立山の芦野へ入植。昭和二十六年（一九五二）に与論から祭神を分祀して、芦野に建立した。
現在地には昭和四十五年頃移転し、現在も山家では、旧暦八月一日を祭祀日として、一族集まって祀りを行っている。

立山エビス神（立山港）

港のそばに立つ小高い岩山に、エビス神を祀っている。『ふるさと歴史散歩』には、次のように記されている。

立山のヤス婆さんがミナを拾いにいった。途中カゴが重くなっているので、見ると中に石が入っている。不思議に



清和神社

逃れることとなった。平氏を追って南下した源氏の武将が、帰ることができないまま住みついた場所が立山であるといわれている。昔の立山は辺境の地で、大変不便な地であった。こうした地を源氏の祖先が選んだ理由は、平家の落人の逆襲を恐れたのではないかといわれている。一番早く来た

思いそれを捨てて、ミナを拾っていると又重い。見るとさっきの石。そんな事がもう一度あった。そこで、この石は何か曰くがあるのだろうかと思ひ、持ち帰り鮫嶋・岩坪・田上家で祀る事にした。三家で祀っていたが、昭和十三年、立山漁業組合が設立された後は、漁業組合の「エビス神」として、組合で祀り・管理を行っている。

清和神社

清和神社は、源氏の祖・五六代清和天皇を祀っている神社である。

のは小川家で、その後、鮫嶋・武田・田上・長野・岩坪家がやってきた。昔は小川家が代々神官を務めたが、現在は区長が務めている。ご神体は「轡くわ」で、種子島では唯一の源氏の神社である。

立山の氏神様由来（清和神社境内）

ヤス婆さんが拾った石を岩坪・田上・鮫嶋・小倉の四家が持ち回りで氏神様として祀っている。

ある年のこと、持ち回りで神様を祀っていた家のおばさんの足の具合が悪くなった。巫女さんにみてもらったところ、神様がおっしゃるには、神様を持ち回りで回るのに疲れ果ててしまい、一カ所で祀って欲しいとのこと。

そこで四家は清和神社の隣の小高い丘の上に社を建てて祀った。

現在は昭和三十九年の神社改築の折、ゲートボール場となったので、清和神社の右手横に移転している。



立山の氏神様

立山の寺（名前のない寺）

立山小学校を少し行くと、法華宗のお寺がある。この寺には名前がなかったが、近くに住んでいた武田嘉右衛門氏宅に寺の由来についての書物があり、名前を付けなかった理由が記されている。

天明四年（一七八四）の記録には、「安城村立山は、安城村官第と隔離する事二里余程の山中に在り、戸数三十有余、内七〇八戸は武田家の余裔」とある。武田家は事情があり、正保年間（一六四四〜四八）頃、種子島家正保のお取りつぶしによって立山に移り住んだ。

立山には昔から寺がなく病気の悪除けや災難等、お祓いをする僧がいなかった。村人たちは、これらの祓祈禱をしてもらうために安城本村まで僧を頼みに行き、招いて来る習慣であったが、風雨雪等想像を絶する難儀をした。役目に当たった人はもちろん、僧も来たがらなかった。ある日、武田家の当主「宗香」は、村人たちを集め、次のように提案したと『武田家系図』に記されている。

我が武田家の祖より伝来の本尊一位を油久村の下の坊に安置してある。これには、坊主が居たのであるが、現在に至っては坊主が居ないので困っている。村の皆さんが、寺を建てようと言う気持ちがあれば、油久の方から本尊を立山に移してもよいのだが（後略）

武田家のともがら、村人一同喜んで、寺を建てることをお願

いすることにした。武田家の当主は書をしたため、天明四年（一七八四）十一月十九日代官所へ申し入れた。この年十二月二十日、寺宇造営の許可が種子島家老「平山二郎兵エ」から書面を下ったのである。翌天明五年九月に立山の寺は建立し、武田六右衛門・武田藤兵衛を油久に遣いに出し、本尊一位を奉持させ立山寺に安置した。

武田家の縁起をたどると、本尊は慶長の役の陳僧本瑞院日相が奉持したと推測される。日相は立山武田家の祖の弟にあたり、日相の数珠は現在も鹿兒島の武田家にあるといわれている。建立した寺であるが、名前は長らく付いていなかった。おそらく「正保の取りつぶし」の際の島主への遠慮から無名の油久下の坊へ預けたのではないかと考えられる。立山へ移してからそのまま無名の寺のままにしていたのではないかといわれている。

寺は、立山の人々の信仰の中心とはなったものの、一〇〇年を経て明治中期には荒廃した。これを見かねた「武田竜造（龍蔵とも）」は、明治二十年に自分の私財を投げ出して再建した。竜造は武田家の流れを汲む



立仙寺

人物で、明治五年に「牛牧社」を創設し、馬毛島を牧場として開発した。また、明治二十七年には「三島汽船株式会社」を設立。竜造が再建した寺も昭和三十年代に改築され、平成九年一月三十一日、現在の寺に作り変えられた。そのときまで無名だったので、住職が「立仙寺」と命名した。

立山の田の神山

立山から野木に抜ける旧道（字折口）の田んぼの真ん中に、古墳状の台地（丘）があり、その小高い所に自然石を立て祀つてある場所がある。昔、古老に尋ねたところ、田んぼの稲が枯れたり虫が来て腐ったりしたのを、集落の人たちは、神様が怒つ



立山の田の神山

てのことと考え、丘の上にて石を立てお祓いをしたところ収まったという。それから毎年田植えの頃に無病、豊作を祈願した。昭和三十年代までは田主が焼酎・米・塩等を上げていたが、その後誰も行わなくなり、現在は、田んぼも全て荒れ果てて、丘にも行けなくなった。

第一節 郷土芸能

おつや口説き

現在から約八〇〇年前、源氏と平家の争いの中、源氏の武将石山氏の娘「おつや」が平家に殺された父親の敵を討つため、京都の東山にある清水寺にこもって、武道の稽古に励み、見事に仇討を果たして丹波の国に帰るといふ筋書きである。

立山にいつ頃伝わったかははっきりしないが、立山は、平家を追って南下した源氏の祖先が住みついた地域だといわれている。



おつや口説き

第二節 年 表

和暦(西暦)	立山校区(のてきやう)
永仁年間 (二九三~九九)	安城村の始まり。人家最初は立山町に建つ
明応2年 (二四三)	屋久島より羽生氏種子島に入り、安城一帯を領す。 当初立山に居住
寛永元年 (一六二四)	六月八日、忠時、安城村芦野で狩りをする(これを「立」という)
天和3年 (一六八三)	六月二十七日、藩主綱貴、久時に命じて「ウシウマ」五頭を種子島に放牧させる。毛は縮み曲がつて薄く、風雪を嫌う。そのため地を選んで牧を芦野に設け、蕃育する
宝暦5年 (一七五五)	七月十五日、荳(りつ・獸を飼う囲い)を芦野の牧に築く。(天和三年から)蕃畜する馬、もとはタテガミと尾は牛に似て髯(ほほひげ)があったが、年を経て髯がなくなった
文政13年 (一八三〇)	九月十三日、官、安城村芦野の牧にて飼育するウシウマを商うことを許される
弘化3年 (一八四六)	立山武田家、嘉三治の代、惣大工榎本寛左工門により、正月「飯屋」建築
万延元年 (一八六〇)	八月二日 安城村大峯牧(御牧) 芦野牧の駒取り 異国船が立山の屋栖沖に碇を下ろし、夷人二〇人が上陸する。船長はイギリス人、同船者二〇人はイギリス・アフリカ・南京上海人であった。甘藷を食べ、夜は野宿する。翌朝、帆を張って東へ去る

和暦(西暦)	立山校区(のてきやう)
文久3年 (一八六三)	安城立山字右京殿黒山尻の海邊に英国船碇泊する。ツケギ(マツチ)を貰う
明治	
16年(一八八三)	立山小学校開校
18年(一八八五)	九月十五日、米国商船カシミア号、種子島東海にて沈没。その乗組員七人、立山舞床浦に漂着、救助される
19年(一八八六)	甌島からの第一次移住民のうち十数戸、立山御牧に移住入植。入植後、天然痘の大流行により多数死亡。疱瘡墓
20年(一八八七)	安城・伊関・安納・現和などの各校を簡易小学校に改め、立山校を安城校の分教室とする
25年(一八九二)	立山校、安城校の分校となる
27年(一八九四)	立山校・古田校に補習科を置く
30年(一八九七)	立山校、安城校より独立する
34年(一九〇一)	立山尋常小学校となる
昭和	
9年(一九三四)	十月十四日 米人漂着記念碑建設竣工
10年(一九三五)	十一月十五日 米国人漂着救助記念碑除幕式
14年(一九三九)	米国人漂着五〇周年記念日祭並びに財団法人奨学資金設立記式典(立山、大踊り・おつや口説き・弁慶踊りを披露)
20年(一九四五)	立山、安城校区より分区、立山校区となる。初代区長は鮫島民也 大川田橋渡り初め式 四月、全島の児童二年生以上全員、伊佐・大口方面に疎開開始 十月一日、疎開児童、今日より順次帰島

		和暦（西暦）
		立山校区の（できごと）
	21年（一九四六）	奥嵐に五〇戸入植、植松・高山集落創設
	23年（一九四八）	農協支所設置。初代支所長は木原伸哉
		立山小学校、増築落成
	24年（一九四九）	国の天然記念物種子島のウシウマ絶滅
	26年（一九五一）	立山簡易郵便局設置。初代局長は鮫島勉
	35年（一九六〇）	西之表・立山間、バス運行開始
	37年（一九六二）	清和神社、改築落成
	40年（一九六五）	僻地集会所落成
	42年（一九六七）	立山公民館、旧校舎を移築落成
	43年（一九六八）	立山小学校新築落成
	56年（一九八二）	立山港改修工事着工
	60年（一九八五）	シミア号漂着救助一〇〇周年記念祭（子孫である ロバートマーシャル夫妻来島参列）
	61年（一九八六）	御牧集落移住百周年記念祭
	62年（一九八七）	御牧公民館落成
平成	元年（一九八九）	四月一日、立山小学校体育館落成
	10年（一九九八）	立山公民館新築落成
	13年（二〇〇二）	立山小学校創立一〇〇周年記念事業実施
	15年（二〇〇三）	カシミア号漂着救助記念日祭、再会実施
	18年（二〇〇六）	県道（大川田川）カシミア橋架橋完成祝賀会及び 渡り初め式
	21年（二〇〇九）	清和神社改修工事 校区ゲートポール場完成
	27年（二〇一五）	三月二十四日、立山小学校休校式

暮らしの風景写真



作業の手を休めて



馬は生活に欠かせなかった



シウゴ婆さんが駆け上がった坂



懐かしの小倉商店